

ガイコツジンなんかこわくない

—複製時代のほくら—

三枝壽勝

—あれっ、死んでたんじゃなかったの。久しぶり、いつあの世から戻ったん？

—あの世なんかねえよ。死んだらね、時間なんかないから、久しぶりも関係ねえんだよな。

—それにしても、死んだ人間と話せるなんてめったにないよな。どこにいたんだい。

—だから、どこにもいねえってこと。時間がないってこと、いるとこねえってこと。

—時間がなきや、どつかでじっとしてるんだろ。

—わかつてねえじゃんか。ほら昔あつたら、飛んでる矢はとまってるって逆説。

—ああ、空中を飛んでる矢は、途中で空間の各点をすべて通過するから、ある特定の時刻を考えると、そのときには空間のどこか特定の点にいるって話しね。ある時刻に空間のある点に止まっている矢が、結果としては空中を飛んでいることになる、つまり止まっている矢が飛んでいるって話しね。

—そう、あの話しは、ちっともパラドックスじゃないのに、いまだに解説で使われているじゃん。そもそも止まっている

とか動いているってのは、異なる時刻における、それぞれの時点での位置を比較しなきゃなんねえんだよな。ある一つの時点での位置だけ見て、それが動いているか止まっているかについて、結論は何にも出ないよな。だから、ある時刻に矢がある特定の位置にいるってことだけから、止まっているとも動いているとも、断定できねえだろ。だからどこにも逆説なんかないじゃねえの。こんなの要するに言葉の定義、概念の問題を反省するだけで解消しちゃうんだ。

—そりやそうだよな。いまでも本に出てるけど、もう何千年も経ってるんだから、そろそろ削除するか、問題の出し方変えるべきだよな。

—でね、この言い方だって、かなり雑なんだよな。動いているか止まっているかに、時間が関係してるってな、あたりまえさ。けどさ、そもそも物事が存在するかどうかだって、同じだつてこと。だつてさ、あるって現象はさ、時間なしに考えられないよな。

—ん？存在と時間の相関性ってこと？どちらも他方なしに単独じゃ考えられないってことね。

—だからさ、俺にや時間が関係ねえってこた、俺には存在なんて関係ねえってこと。

—ああ、それを言いたかったの。どうせ死んでるんだから、どこにいたって同じだけね。

—だからさ、どこにもいるわけじゃねえっての。

—じゃ、何が残るんだい。

—何ってやいいんだろ。関係性の痕跡ってとこか。

—それでいいよ。要するに感ずるゆえんあって現われたってことね。鬼神感ずるがゆえなり、って昔カイアン先生が言ってたっけ。

—高校生の会話みたいじゃねえの、なつかしいね。

—今年ほとんどもない年だったろ。ニューヨークのビルが、自爆心中攻撃で、影も形もなくなっちゃったんだからね。だのに、中国じゃさっそくその事件のオモチャを売りだすし、ちゃっかりしてるよね。

—ふんふん。でもちゃっかりしてるのは中国人だけじゃねえだろう？

—なんで？

—どうせいつものこと、世の中乱れると、他人の不幸ネタにして原稿料かせいだり、名前売る絶好のチャンスってやつ、ぞろぞろ出てきたんじゃないの？

—まあまあ。で、事件が起ったとたん、アメリカの大統領が戦争だって宣言したじゃない。国家が個人に対して戦争だってんだ。

—個人が国家と対等だってやつ、聞いたことあるぜ。

—誰？朕は国家なんたらってやつ？

—じゃねえよ。ほら偽札事件で騒がれた画家、ほら、あの野次馬ゲンペイ。

—ああ、新聞社の出してる週刊誌に、「アカイアカイアサヒアサヒ」って国定教科書のパロディ載せてから、欄外に「朝日は赤くなければ朝日ではないのだ」って書いたもんで、回収するやら責任者処分するやらで、大騒動の張本人。

—そうそう、わたしは日本国に通貨不安をひき起したのだから、日本国と対等の緊張関係に置かれた一国家なのである、とかなんとかいっちゃってね。

—だけどやっぱり、個人は個人だぜ。ドス一丁かまえた男が、ミサイルに立ち向かっている戦争なんて、マンガにもなんないよな。世界中が脅えちまって、テロのどこが悪い、なんて言う勇氣のあるやつなんかいなくてさ。テロは悪い、戦争ならいくら殺しても文句あるかって、すごんでるんだ。

—テロで世界中、一番荒し回ってた張本人たちが、そんなこと言ってるんだからせねえよ。

—そりや、自分がやりやテロでなく、ほかがやりやテロだつて言ってるだけだからね。テロが良いって言ってるわけじゃないけどね、あのビル崩壊する画面見てスカッとした気分になったんだ。ありや、何だったんだらうね。

—そりや、他所の国でテロやって荒しまくってた当事者だつて、たまには同じことやられることありますよ、つてこと見せつけたからじゃねえのかな。

—そうかな。だけどね、その後の爆撃の画面見ると、悲惨さばかりで気分が落ち込むね。すごくヒステリックじゃない。こんなこと真珠湾いらい初めてだとかいってね。

— おい違うぞ、あんどきや、ハワイはまだアメリカの本土じゃないぜ。彼らが併合した植民地だったじゃねえの。

— あつ、それと同じこと、チョム先生も言ってた。しかも、西欧各国が野蛮なやりかたで支配してる地域の犠牲者から、本土を攻撃されたのは、今回が有史以来、初めてのことだつて。だから、彼らにとつてショックだったんだつてね。なるほどね。世界つてまだ相変わらずなんだ。

— 世の中なんかちつとも変わつてねえよ。悪くも良くもなつてやしねえぜ。復讐に執念さえ燃やしや、正義になるんだ。どんな行為だつて正当化されるぜ、残虐な殺人だつて快感に変わるんじゃないの。

— そうかな。あんなの見てると、昔の領主たちがやつた狩りを思い出すよ。動物の代りに人間、追いこんで狩りたて、一方的に殺しまくるつてやつ。昔の風俗画でも、試し切りや、試し射ちの絵見た憶えがあるね。

— 同じだぜ。道具だけが進んでるのさ。

— そんでさ、捕まえた獲物を、グアンタナモだかの基地に運んでさ、再生人に加工して特殊工作に再利用しようつてのかな。資源は有効に再利用しようつてね。

— あいつらさ、昔な、日本の将棋は、捕虜になった敵の駒を、自分の方でまた使うから、捕虜虐待の象徴だつて騒いでたんだぜ。

— そうやつて、人間を死ねない状態に追い込むつてことだからね。

— そうそう、思い出した。大分前、実尾島事件つてのあっただろ。もう忘れちまったかな。

— 憶えてるよ、死刑なんかで、ほんとはこの世にいないはずの人間たちを、離れ島に集めて特殊作戦の訓練やつてたつて話しだろ。

— あんどきや、びつくりしたぜ。俺たちの目の前に、こんなことが今でもあつたつてんだからな。

— あれ、その後どうなつたんかな。訓練があんまり苦しいつてんで、反乱起してニュースになつたんだよね。

— 報道ストップして、あとどうなつたか分らないけど、たぶん、あれで今度は、晴れてほんとに、あの世の人間になれたんじゃないの。

— これからも、そのすごい道具持つて公認されてるやつらが、逃げるやつ後ろから撃つて、正当防衛でしたつて、すまして言う風潮が広がるんだろな。世界の人口が増えすぎたから、ちつとは減らしましよつて陰謀なんかな。

— 人口の何が問題になるんだよ。

— 今ざつと六〇億じゃないか、その五分の一は中国ね。今世紀末までに九〇億ぐらいになつてから、段々減るつて予想があるね。いや八四億で止まるという説もある。めでたいことだ。ただし六〇歳以上の人口は三〇パーセントを越えるし、アフリカはエイズの影響で増え方が鈍いがそれでも倍にはなるとか。

— その程度ですむんか？ もつともつと、地球上には人が住めるんじゃないの？

— ちよつと計算すりゃいいよ。地球上の陸地の面積が一億五千萬平方キロメートル、だから一メートル四方に一人ずつ立たせりゃ、一兆五千億人立つてられるよ。

— それじゃ、どこもかも満員電車みたいにぎっしりで、身動

きもできないぜ。

—もつとあるよ。地球上で生産されるエネルギーは、結局、太陽から提供されるもので補充されるだろ。だから、毎日地球上に降り注ぐ太陽エネルギーを、全て食糧に換えちまうと、その千倍、千八百兆人も養えるんだ。もう地球上に、人間が団子になって、蛆虫みたいに重なってうごめいてんの。

—エネルギーが全部食糧になってるんだろ。電気も着物も何にもないぞ、光もないんだから、世の中真つ暗だぜ。そんなかで人間は裸で積み重なってんだぞ。

—まあな。これだけかたまってりや寒くはないさ。でも、パラパラ宇宙に振り落とされるやつも出て来るだろうな。

—共食いしねえのかな。

—そんなことしたら、異常プリオンで死んじまうよ。食用人間なんてことになったら、人間も焼却処分されるんだろうな。狂牛病の事件も妙だったね。学生に教わって、ゼロリスク症候群って言葉知ったけど、僕らってすぐにパニック起こすのね。食つても構わないのに牛肉が売れなくて。これだって、当事者には死活問題だけど、追い詰める側では好みの問題程度なんだ。

—だけどな、どんなに非現実的だって、理論的にわずかでもリスクがあれば許せないって発想と、テロ勢力は根絶しなけりゃいけないっていう非寛容潔癖思想とは、どつか似た感じがするぞ。どいつもこいつも同じだぜ。

—異質な他者は排除され、差別されるんだ。うちでもセクシャルハラスメントの委員会あるけど、処分までゆくのは結局は異質な文化を背景にもつ外国人だろ。日本人には、どこ

にでも転職する自由が認められるべきだって言いながら、外国人には仕事を続ける自由も認めないしね。

—差別なんてなくなりやしねえよ。学者が研究するために、材料として残してあるんじゃねえの。

—ぼくだって、申請もしなかったのに、学会の名簿から削除してくれたいしね。差別の原則からいくと、そのうち、ぼくたちが追い出されたことが正当化されるだろうね。本人たちの人間性に問題があつて、そんな仕打ちを受けるのは、本人の責任だから当然だったんだってね。

—だけど、だれもそんな個人的な話しにや興味ないぜ。人間なんて冷たいんだ。俺たちの遠い親戚の、大腸菌やら、線虫エレガンス、シヨウジヨウバエに、カエルにマウスたち、名門一族が実験台になって、どんなに悲惨な目にあつてるのか、考えても見ろつてんだよ。

—なんで、いきなり、大腸菌なんだよ。話しを飛躍させるなよ。

—あんたもいつペン死んでみなよ。人間つてたいしたことないぜ。人類がアフリカからユーラシア大陸に出てきたときや、二百人だったつてんだろ。それから十五万年ほどで、今みたいになつたつてんだ。たつたそれぐらいの時間しか経つてねえんだよな。昔は早熟だから十歳で子供生んだとしても、一万五千世代じゃねえの。一世代ずつ代表一人出して、一列に並んでも十キロになんねえよ、目のまえだぜ。

—虚しくなる感じだよ。

—新しいとこ引越したのに、頭ちつとも新鮮じゃねえな？
—なんにも変わんなかったのかな。世界一応対の不親切な図

書館も、相変わらずだしね。

— 例のあれね。利用者の言葉遣いが悪いって言ったり、質問したら、後むいて上司と相談始めちゃうってやつか。

— ほら、いつだか非常勤の人がきて、こんなにひどいのは、北朝鮮ぐらいじゃないかって、言ったじゃない。そして、それ聞いた朝鮮大学の先生が、うちの国の図書館だってこんなに不親切じゃないですよって反論したよね。

— あいつら自動販売機になりたがってんじゃないかねえの？ 私らの理想像でーすって。

— われらの願いは、自動販売機ってところか。

— まあな。

— なにか言ったら、いったい何を、どうすればいいんですか、だって。逆に反論してくんだよ。

— そのくせ、改善のためのアンケートには答えろ、とか高圧的なことは、平気でやるんじゃないかねえのかな。

— まさにそのとおり。学生や利用者のことより、上部への報告と、御機嫌うかがいなね。それでも、教育的配慮と云う点では、事務官はまだ教官よりましなんだからね。

— 教育ってな教官の役目だけ。

— ところが、学生の処分なんてことになる、杓子定規で、厳しくしろってのは、教官のほうなのね。

— おれも昔見たぜ。盗作問題で社会を騒がせた教授が、大学だって社会の一部だから、学生を甘えさせるな、とか言ってたぞ。自分が辞めなくてすんだのは、大学で一般社会の常識通用しなかったからだったの、気がつかねえふりして、とはけてるんだ。

— 今でも、教授昇任審査のとき、こんなの論文って言えるんかって問題になったの書いた先生が、処分は厳密にしろって言ってるの見ちゃったな。

— 結局、新しい環境になったって、何にも変わってねえじゃねえの。

— 変わったことあるよ。清潔でモダンな人工空間っての、精神状態をおかしくするらしいしね。周辺環境も変だよ。郵便物がちよくちよく行方不明で着かないしね。海外から三日でくるはずのEMSが、一週間以上になつたりとか、妙なことが多いよ。郵政監察室に言っても、外部で分かる以上の答えはしてくれないしね。

— 前にもそんなことなかったっけ？ 朝鮮大学の先生に郵送したレポートが消えちまったじゃん。

— 前はその程度で済んだよね。それから、エイジェントの学生の配置も、変わったみたいだね。プロの方は、相変わらずのポジション守って頑張ってるみたいだけどね。

— あんたに、そんなこと分かるわけねえだろ。

— 感じだけね。でも、昔だったら、首がいくつあっても足りなかつたらうに、未だに首がつながってるのは、あり難い御世でござる、なんてガイコツ先生も言ってたっけ。

— また先生か？

— 最近は事件起す方が、大胆で露骨だよ。記事が突然消えたり、背後の演出者は隠れたままとか。どうやら、捕まえちゃいけない犯罪者ってのが、いるんじゃないかね。そんなこと知らないで、うっかり捕まえたりすると、あとで仕返しが大変なんだよな。

— 錯覚してるんじゃないの。やったことで決まるんじゃないからねえ。お上ににらまれりゃ、誰だつて犯罪者になれるんじゃないの。

— 錯覚なんかしてないよ。僕らの住んでるところって、外から見りゃ羨ましいぐらい、模範的な全体主義の社会だよ。アメリカとの戦争に負けたとたん、民主主義に変わったはずなんかないよね。韓国や台湾とは違うだろ。

— 戦争に負けたやましさを、ごまかすため、勘違いしたか、自己欺瞞に陥ったんだぜ。自尊心を維持するための態度さ。本来の自分たちは、あんなんじゃなかったんだとかいってごまかしてさ、民主主義者って態度とってるんだ。そのくせ、世の中、批判する時にゃ、いつでも身をひけるように一休みの用意してさ、自己保身と利己主義だけは手放さないってのさ。

— 周り見ても虚しいけど、自分見ても虚しいね。朝鮮文学やってます、なんとか言ってきたけど、そんなもの、学問でも何でもなかったんだよな。そういや、あんたも生きてるとき、似たようなこと言ってたっけ。

— 俺の場合は、やってることが、どの程度の水準かっつのが、気になってたんじゃないっけ。

— ほんとは朝鮮文学だけでなく、歴史だつて、言語だつて、朝鮮なんとかって頭につけたものなんて、学問として成り立つはずなかったんだよね。

— そう言いながら、あんただつて翻訳出したり、本国で論文書いたりして、やってきたじゃねえの。おれは日本でいっぱい本出したけど、本国と交流する前に、死んじまったんだぜ。

— 本国でどう言われたからって、関係ないさ。そんなこと、

彼らにまかしたときゃいいんだ。外国の文化を研究するつての、僕らが異質な文化や発想法を、どれくらい理解できるかっていう、僕らの社会における探求だったけど、結局、何にも成果なかったって感じだね。たとえばさ、また例の翻訳のこと。

— 例のつて？

— 何人かで翻訳した下原稿を、出版社の編集の担当者に見てもらったんだ。そしたら、ちよつと語学力が、どうかなって心配だった人の原稿が問題ないって、まず合格したのね。

— そりゃ、その人が、日本語の表現に気がつかなかったからだろう。編集の人つて、読者を代弁してるんで、その人がよくないって思ったのは一般の読者に読めねえ、読む気なくす物だ、つてことじゃねえの。そりゃ翻訳として落第さ。やっぱり、原文がどうだなんて一生懸命になる前に、日本語の表現のことに力を注ぎつての。

— うーん。でね、僕たち、少なくとも僕あ、外国文学の翻訳つてな、異質な考え方や、表現の仕方まで含めて、理解しようとする試みの一つだと思つてたの。だとすりゃ、自然な日本語からすると、ちよつと違和感ある表現や、言いまわしだつて、生かさなきゃつて思つたのね。それは原文に捉われすぎだの、不自然な日本語というのとは、一寸違うかなつて思つてただけだね。

— そりゃな。だけんど、日本じゃ、常識的な日本語の表現からはずれたものなんか許さねえだろ。

— まあな。じゃあ、僕らは、あんまり原文の持つている細かいところにこだわらず、おおざっぱに見てから、あとは日本の読者に受け入れられるよう努力すべきだということ？

—そりやおかしいぜ。原文はそれとして、徹底的に厳密に理解しておいてさ、その伝えようとすることを、把握した上で、日本語の表現に努力しろということじゃねえの。

—あんたいつのまにか、おおざっぱな言い方するようになったね。

—どっか違ってる？

—いや、原文の発想法や表現法が、ほくらのものと違ってたから、それは、どう訳しても違和感が残るんじゃないの？

—それさ、ただ抽象的に言い合ってるでも、結論でないぜ。具體的な例でも、挙げてから言わなきゃ。

—あるよ。またまた金素雲に登場してもらおうか。彼の翻訳は名訳だという評判が高いよね。彼のすごい日本語に感動して、ファンになった日本人て多いらしいんだ。ところが、この翻訳を原文と対照するとね、かなり違っているんだ。だけど、それは彼が原文に対する深い理解を持っていて、原詩の味わいを生かすために、原文に則して訳さず、その伝えようとすることを、最大限に発揮できる表現法を使ったからだ、というのね。一見すると原詩とは対応しない日本語になっているのだろ。まさに翻訳は第二の創作だ、ということの例なんだとね。普通だったら、これになかなか反論できないよね。いたい原詩を深く味わうてことを、客観的に示すなんて難しいことだし、解釈が人によって違う可能性だつてあるからね。—そりやそうだぜ。一つの解釈だけが正しいってのはなさそうだぜ。

—文学ってそんな曖昧なものなんかね。だけど僕は最近、金素雲が意外に原文を正しく読んでいなかったこと、証明し

ちゃったんだ。

—そんなことできるか。彼、朝鮮人なんだぜ。彼の読む朝鮮語の詩の読み方に、いちやもんなんかつけられねえぞ。

—もちろん決着がつかない話で議論しても、何にもなんないよね。僕はもつと単純な、誰が見てもわかるところで話しをしようつての。

—どうやって？

—じつは彼が翻訳した詩を、原文と比べると、彼の原文の読み方が、かなりいいかげんだつて分かるんだ。

—どこが？

—彼はね、自分の使ったテキストの誤植を一切訂正してないの。色々なテキストを比べれば、どれが正しいかすぐ分かるだろう。その程度にしか原文を見てないの。

—だって、昔は原文を探すつて、大変だったんじゃないの？
—だけどね、同じ原詩のテキストを二つ見ているときでも、どっちが正しいかって考えなかったみたいなんだ。適当にどれか一つを選んでるんだ。とつてもない脱落があつても、適当に補つてつじつま合わせるのね。

—それぐらいありうるんじゃないの。要は原文の味わいを、全体として正しく把握してるかどうかだろ。

—だけどね、彼がそれほど正確に、原文を読んでなかったことはすぐ分かるよ。たとえば原文のハンゲルを、似たような他の字と勘違いしてるらしいところもあるしね。もつと凄いのは、彼は朝鮮語で漢字を、正しく読めなかったふしがあるんだ。ごていねいに、間違えて読んだ漢字に翻訳では日本語のルビまで振つてあるんだ。

—彼は正規の教育を受けてなくて、猛烈な独学をしたんだっけ？

—そうらしいね。それも日本語の方だろうね。朝鮮語は日常会話以外の教養は、どれほどだったんだろうね？漢字の読み間違いから推測すると、教養ある朝鮮人の必読書だった『詩経』も見てなかったらしいんだ。

—でも、だからって、彼が朝鮮の近代詩を、日本語に翻訳する資格がなかった、とは言えねえだろ？

—そうだよ。問題にしてるのは、その翻訳の仕方さ。

—だからさ、たまに間違いがあったって、全体として問題になるんかどうかだろ。

—でね、さっき言った原文の読み間違いだけど、あんなに原文を間違えて読んでるのに、翻訳された詩は、ちっともおかしくないのね。

—どういうこと？

—だって、彼の翻訳では文脈なんか関係ないの。彼の訳詩は、雰囲気だけが肝心なんだ。彼の翻訳ってのは、もとの原詩の内容に関係なしに、原詩の中のいくつかの単語を拾い出して、とてつもなく雰囲気のある抒情詩を作り上げるところにあるんだ。つまり彼には原詩がどんな内容で、どんな文脈をもっているか、ということは関心がないの。原詩の中にある、いくつかの気に入った語句だけを取り出して、それを繋ぎ合わせて、新しく抒情的な詩をこしらえる、というのが彼のやり方だね。だから雰囲気は感じられるけど、何を言ってるかという文脈は、さっぱり伝わってこないの。だから、いくらもとの詩の内容を変えても、翻訳には何の影響もないってこ

と。

—なんで、彼はそんなに、叙情的な雰囲気にとだわってんだ？

—こだわったわけじゃないだろうけど、日本語では雅語を並べると、なんとなくそれらしい雰囲気の時らしいものができる、ってことを知ったんじゃないのかな。しかも日本人って、悲哀を帯びた朝鮮人ってイメージも好きだしね。ちよつと違つたかな。

—要するに、日本人の思っている、朝鮮のイメージに合わせて、翻訳を作ったってことじゃねえの。

—まさかそこまで卑屈じゃないだろうけど、周りの日本人は、そういうの要求したかもね。

—ありのままの他者を見ることは拒否してるんだ。

—とにかく、なぜ元の原文にこだわった翻訳が受け入れられないのか、原文さえ無視すれば、評判のよい翻訳になるかっていう疑問が、有名な翻訳家の仕事で証明された気がするんだ。—要するに、読む側は、見たいものしか見ようとしな、ってことじゃねえの。

—それでね、最近思うんだけど、一言で翻訳しても、目的の違うものがあるなってことね。

—それって、出来がいいとか悪いたあ、別のこと言ってるんだろ。

—うん、この百年ちよつとの日本の翻訳って、別に異質な文化を理解する目的でなされたんじゃないみたいね。異質な文化現象の移入には間違いないけど、それは自分たちも、先進国の文化現象に匹敵するもの作れるんだぞ、ってこと示すための、

努力の一環だったのね。

— 異質なものの受け入れながら、理解しようとしなかったって言い方、もちっと説明しなきゃ分かんねえよ。

— うん、なんてのかな、要するに、自分らが先進国だと思ってるそこにはあるのに、自分とこにないものを見て、自分たちだって、そんなもの理解できるんだ、自分たちだってそんなもの作れるんだ、って主張したかったんじゃないの？

— だからそれって、日本の近代化の問題だろ。小説だって詩だって、その他もろもろの学問だって、そうやって成立したんじゃないの。

— だろう、おかげで僕たちの文化が先進国なみになったって言うんだろ。だけど、それは決してもとの文化現象を、その背景から基盤まで含めて理解するということとは違うよね。

— 当然だぜ。要するに初期の翻訳ってな、俺たちが小説や詩を創作するための、基礎的な練習作業みてえなものじゃねえの。そこじゃ、もとの文化が正確に移されているかなんて、二の次だろ。要するに、てめえらが先進国って思ってるのとこのやつに、追いついて、仲間入りさして下さいって言っただけじゃねえの。

— だからね、そういう翻訳って、本質からいえば、翻訳というより、翻案に似てるよね。まあ翻案もどきって言うてもいいかな。そうやって始まった翻案もどきの僕たちの文化は、確かに僕たちの社会では大切なものなんだろうね。こういう翻案もどきは、日本の文学の一員として重要な役割を果たしているんだから、日本語の表現にも十分神経を使わないとだめなんだ。

— でねえと、誰も読まねえし、売れねえよな。

— そうやって新しい文化現象が成立したんだから、それはそれとして意義があるよね。だからそういう翻案もどきに対しては、本質的には誤訳がどうのこうのって、あんまり問題にならないんじゃないかな。ときどき誤訳を摘発する本が出て売れたりするらしいけど、あれはちよつとずれてるかもしれないね。要は、僕たちの社会での読者に受け入れられりゃいいんだし。

— だから、もとの原作がどこのものであれ、俺たちの周辺の読者が楽しめりゃ問題ねえってことだろ。もとの原作について言うんだったら、せいぜい、読者がもともと持つてる先入観に逆らわない程度の配慮だけはしておけってことだぞ。

— どうも、原作の背景なんかには神経使いすぎると、読者に受け入れられないってことね。あんまり先入観に反することや、なじみのない設定をそのまま移すと、反発かいそうだしね。

— で、あんた何言おうとしてんだ？ 翻訳するとき、あんまり原文にこだわんなってこと？

— ち、ち、違うよ、反対。僕が今まで考えてきた翻訳って、これとは全然違うことだったなってこと。僕は外国文学って、異質な文化をどう理解するかってことが中心だったから、それを紹介する翻訳では、異質な思考方式も、そのまま反映させるやりかたが、それに相応しいって思ってたの。

— するってえと、翻訳する時、妙ちくりんな日本語が登場するってんだろ？

— それこそが、異質な文化の特色の一部の反映だからね。要するに、僕たちの先入観にさからう違和感の存在そのもの、異質な文化、そこでの思考方式の特色が現われているんじゃない

いか、つてことなの。

— なんだっけ、これまでの翻訳、あなたの言う翻案もどき、それってさ、準日本文学ってのか、準創作って言った方がいいかもしれないね。だつてさ、もともと外国のものだつて言ってるけど、要は、俺たちの社会での読み物としての性格が重要なんじゃないか。だから、そこに含まれてる異質な思考方式や習慣なんてな、ちよつと変わって面白そうな、興味を引くための薬味みたいなもんだろ。それでもさ、訳すときの苦労じゃ、どっちも大した違いはなさそうだけんどな。

— もちろんだよ。ただね、最後には僕たちの社会での読み物としての要素が第一の関心事だつてことと、先方の文化現象より訳者の自己表現が第一つて点で、準創作って性格になるんだよ。

— だけど、見かけだけじゃ、そいつと、あなたのいう異質な思考方式をどうのつてのと、区別つかねえんじゃねえの。

— そうかもね、だから翻訳は第二の創作だとか言つて、訳者の自己表現に重点を置くやつと、若気の過ちを繰り返す同棲つて、先方の文化にのめり込んだやつとの、翻訳の違いね。後のほうのやつは、できるだけ訳者の存在を消そうとするんじゃないかしら。

— 見かけじゃ、どっちも訳者の個性が強烈に出ちまうんじゃねえの。どっちにしろ、理想的で完全な翻訳などねえよ、つて言えるんじゃねえの。

— 理想的で完全な翻訳、つて言い方はあいまいだよ。もし文学が、ある特定の言語の特質を極限まで生かした技巧の産物つてんなら、それを異なった言語で再現するなんて、元来

不可能なのはあたりまえじゃないの。だから、原作をネタに、翻案もどきの準創作をするか、するずる原作に引きずられるかの二通り正反対のやり方があつて、それを別個のものとして区別する必要があるんじゃないかつてこと。いつしよくたにするど、結論のないお喋りにしかなんないからね。

— なんて、そんなことにこだわつてんだ？

— そりゃね。別に小説だの詩だの、翻訳のこと自体が気になつてるわけじゃないよ。何で、まだ原文もまともに読めない人に限つて、朝鮮の詩や小説をすぐ訳したがるんだか、その訳がだんだん分かつて来たつてこと。

— 西洋のものの翻訳つてな、俺たちだつてそんなの書けるし、翻訳だつて出きるつてことを見せるためだつたんだろう。だから、そいつらは準創作だつたわけだ。だつたら朝鮮のものなんか、何のために翻訳するんだ？

— 準創作の翻案もどきは、先進文化と肩並べたい、彼らの仲間入りしたいつて欲求からやられたんだよ。じゃあ、先進でないところ、つまり後進、もつとあからさまに言えば未開な地域に対しては、たぶんそんな欲求、なかつただろうね。だから彼らの文学に対する関心つてのは、こんなところにも自分たちと同じような作品がありうる、つてことに対する驚きだつたんじゃないかね。

— そういや、朝鮮の文学の翻訳を読んだやつ感想つて、いつも同じなんだな。朝鮮にもこんな素晴らしいものがあつたということ初めて知りました。これからも関心を持って読んでいきたいと思ひます、つてんだ。

— そうそう、要するに、こんなところにも日本の文学に匹敵

する作品があつて、日本語に翻訳できるだけの水準を備えている、つてのが驚きなね。自分たちより進んでると思つてたら、とつても出てこない反応だよ。

—まあ、見下してなきや、なかなか起こんねえ発想だらな。で、それが、朝鮮の詩や小説訳したがるつてことと、どうつながんだ。

—だからさ、そうやって軽くみてるから、少々実力が怪しげでも、翻案もどき準創作の欲求を充たすのには、うつてつけない材料つてことになるの。だから、この現象自体はね、翻訳もどきの文化の伝統、つまり日本の近代化の伝統の中で成立してゐるんだよね。

—てなことか。いつまでたつても、相手を理解するつてのには距離がありすぎんだ。

—だからさ、過去の歴史のことを論じるときにも、すぐ朝鮮人を呼んできて話をさせるじやない。けど、そうやって朝鮮人を利用してること自体が、過去の植民地時代のやり方だつてことに、気付いていなね。自分達のイメージに沿つた役割しか与えないんだから。

—今だつて、「雨の降る品川駅」の「日本プロレタリアートの前だて後だて」つてのが、植民地支配者の発想を抜け出さないつてこと気付いてねえかもな。

—日本人だけじやないだろうけど、自分中心でしか見ないからね。

—歴史に対してだつて同じことだよな。

—だよな。もし過去の歴史反省するつてんだつたら、すぐに朝鮮人なんか呼んできて、本人の専門でもないこと喋らさな

いで、朝鮮人には彼らなりの歴史における反省から何が出てきたのか話させ、互いにそれを突き合せりや、過去に対する反省を共通のものとすることができると思うんだけどね。

—まったくだぜ、朝鮮人に、いつも日本の過ちを追及することしかやらせねえつての、歴史の主体は日本人だけだつて言つてると同じことなんだぜ。

—文学だつて、いつも日本の枠組みで朝鮮のもの見ないで、それぞれなりの特質を認めて接したらどうかと思うんだけどね。小説だの詩だのといつてるけど、みかけは同じでも本当はかなり違うよね。

—その違いつてどこにあつたつんだつてね。

—文化現象進化の中立論つて知つてる？遺伝の場合と同じでさ、文化現象つてのは、いつでも絶えず新しい現象が発生しては変化してゆく可能性があつてさ、そいつらが偶然やら何やらが関係してさ、残るものが残つていくんさ。不適応なものは消えてくけど、害にも益にもならぬ、どうでもよいものは大抵は生き残るんだよね。

—世の中に害がなけりや、あつてかまわないつてんだろ。

—例えばさ、色盲が文明地域で多いのは、生存に適しているからでなく、生きるのに関係なくて、どうでもよいからだよね。色盲は赤や緑を識別する遺伝子の乗つかつてる染色体の癖で、かなり頻繁に突然変異が出来やすいだろ。だから、別に先祖に色盲いなくなつて出て来るよね。今の世の中じゃ、色の識別なんて生死に関係ないから、どんどん増えていくんだよね。ほつといたら、将来は色の識別できない人の方が多くなるかもね。

—それって、文学とどういう関係があるんだ？

—ほら、僕らが小説だ、詩だといってるけど、そのジャンルの中でも、文化的な外のジャンルでも、どうでもよいものが勝手に生じては残ってくんじゃないかってこと。ただそんな中で、もし出来たもんが、社会で許されないものだったら、生き残れなくて消えてくってこと。

—まあな。

—だけど、この話ね、普通とは逆のこと言ってるんだぜ。普通はね、社会の発展形態に応じて、様々な文化形態が生じてくるって言うてるからね。生存に不適切なやつが、淘汰されて消えて行くという言い方は変わんないけど、生き残るのは、最適なものだって言ってるからね。要するに、特に不都合のないやつは見逃されて残ること。新版構造主義文学ってなもんがあつたらさ、そこでは近代文学の発生について、その形態自身についても、その原因や要素を一義的には決めず、その機能が同じなら、さまざまな発生の仕方を認めるなんてことになるんじゃないの？

—たとえば？

—今ね、韓国にも日本にも小説ってものがあるだろ。今では似てるよね。けどね、その発生をたどっていくとさ、かなり由来が違ってきそうなんだ。進化論の比喩でいうとさ、現在は見かけが同じ人間でもさ、その発生の初期にまでさかのぼって行くと、たとえば一方のはチンパンジーの先祖にたどりつき、他方はイグアナの先祖のところに到達するとかいったようなことさ。

—イグアナ？何言ってるんだ？

—実は、近代の文学発生のころの文体の成立をみると、どうやら、朝鮮は日本とはまったく近代文学の文体の発生の様子が違ってるみたいなんだ。

—俺の生きてた頃、まだそんな話なかったぜ。

—そりゃ最近の研究だからさ。どうも、その発生のしかたの違いがさ、現在の小説のありかたの違いにも、反映してるんじゃないかってことね。

—そーいや、韓国の小説って、かなり日本と違ってたな。今でもかな。

—今でも事情は変わってないよね。翻訳するときが一番苦労するのは、作品として何を選ぶかだからね。手当たり次第に選んだら、大抵の日本人は読まないよね。面白くないから。

—何で、日本人には面白くねえんだ。

—そりゃ、今でも小説の社会的役割が根本的に違ってるからじゃないの。

—社会的役割って？昔の士大夫の精神を引きずってる作家たちの意識ってこと？

—おっと、だからリアリズムなんてのが、最近まで韓国でもてはやされてて、政治や社会の問題を扱わないと相手にされなかって風潮だったよね。

—俺はだからキム・スンオクとかチェ・イノとか、そつからはみだすやつを評価したじゃないか。

—だろ、韓国での主流では、あんたの言う、読者を楽しませようって作家はだめだったのね。どこか、壮士としての演説やら啓蒙家としての口調が覗いてないとだめなんだ。

—でも、最近は何もすたれたってんだらう？だったら、そ

れも変わったことになるじゃねえの。

—うん、政治や社会問題はだめになったね。だけどやっぱり同じさ。読者を楽しませるサービスピ精神が相変わらずさっぱりないのね。深刻ぶって面白くない書き方するみたいなのまだあるよね。

—要するに、読んでるやつを面白がらせるといふ精神が不足してるんだろ？

—そうなんだ。小説を書くことって、知識人として社会で認められるための厳肅な行為なんだね。

—そんなこと聞くと、いかにも面白くなさそうって感じするぜ。

—けっこう面白いよ。外国文学の研究って、そんなことまで対象にしちまうから、ちつとも関係ないさ。ついでに、外のことじゃなくて僕たち自身、日本人のことも見えてきちまうのね。

—そりゃそうだけ。結局、てめえ自身のことが見えてくるってんだろ。

—そんでね、前から言ってたんだけど、中国も含めて朝鮮・日本の文学をいっしょにして眺めるとさ、妙に色んなこと見えてくるよね。たとえばさ、探偵小説とか空想科学小説ってのが朝鮮にはないのね。

—そうだったけ？金來成っての、いたじゃない。あんたも論文に書いてたぞ。

—あれは朝鮮で例外的に知られた探偵小説家だね。だけど本格的な探偵小説家って、彼しかいないんだ。それでもいいけれど、彼の作品と、江戸川乱歩や中国の程小青の作品を比べて

見ると、面白さが全然違うね。程小青の作品は、数も多いし、かなり読者を楽しませるサービスピ精神心得ているけど、金來成の代表作「幻想殺人」なんて、初めっから犯人を指摘しておいてから、どうやって彼を逮捕するかの駆け引きだけだしね。「白仮面」って太平洋戦争の時に書かれたスパイ物じゃないか。

—空想科学小説はどうだったっけ？

—朝鮮ではこれが全く空白なんだ。僕は「宇宙小説アルゴル」って、本格的なファンタジー物知ってるけど、肝心の韓国人がこの作品、知らないんじゃない、話しになんないんだよね。中国なんてさ、昔からいっぱいあって、倪匡（ニークワン）ってのは今の人だけど、いっぱい書いていて人気あるみたいだしね。彼の「藍血人」なんてさ、土星人が登場してね、日本を舞台にして、めちゃくちゃ暴れまくって、まるで香港映画のアクション物だよ。そういや、近代文学の大家、老舎の初期作品「猫城記」だって、火星に行ったら、その人類は猫だったという、変わった話だよ。当時の中国を風刺したのが見えちゃうけど、それなりに面白く読めるじゃない。台湾人なのか、張大春にもちよつと暗いけど人造人間の悲しみを扱ったものや、反未来小説みたいのがあるね。大陸の少年物では、たいてい外国のスパイやテロ団が登場するね。でも秒速四萬キロであつという間に銀河系を飛び出して、ケンタウルス座まで八年も宇宙をさ迷うなんてあほらしい話、僕は嫌いじゃないね。

—その代り韓国じゃ、武俠小説ってのがあつたんじゃないかっ たっけ？

—そうそう、チャンバラ物があつたよな。この数年、ファンタジー小説やらなんやらに圧されてさえないけど、昔はマニア

はそればかり読んでたね。でも変なんだ。あんなにマニアがいたのに、名のある武俠小説の専門作家がいらないんだ。それぞれの世代で、みな読んでた作家が違うみたいだからね。吉川英治だの中里介山なんて誰にでも知られている名前がないじゃないか。韓国の人に武俠小説の作家の名前を聞くと、金庸だの古竜だの結局中国語の作家ばかりじゃないか。

— 何で今でも韓国には、本格的な推理小説や空想科学小説が出てこないんだろう？

— 韓国の人は、その社会の中にいるから、そんなこと考えもしないかもしれないね。おそらく、そういう作品を読んだり書いたりするのが好きじゃないってことじゃないの。そのくせ、文学の研究者は、そんなのが理論的には大切だと思ってらしくて、論文だけは書くんだ。マンガだって、今じゃとてつもなく高級なジャンルになつてるじゃないかな。マンガの研究書なんて、日本じゃ考えられないぐらい豪華版なんだよ。

— じゃ、なんでそういう作品は書いたり読んだりする気にはならねえんだ？

— 僕ね、一度、ある韓国人に聞いたの。そしたら、自分達はね、頭を使ってそんなめんどくさいこと読むような忍耐力がない、つて答えてくれたんだ。要するに論理的に考えたり、推理したり、知的なことに関心を示すつてことが苦手だつてことなんだ。

— おいおい、そんなこと一般化すると、また問題引き起こすぞ。

— だけどね、これは韓国人が言ったんだぜ。それに韓国

会全体で、推理小説もSFもまだ公民権確立してないのは事実だからね。

— するてえと、そもそもなぜ韓国の人はそういうものを認めようとしれないか、つてことが問題になんねえのか？

— だけどさ。そんなことやつてどうするの？ 日本や中国から見たら変かもしれないけど、そういう社会がちゃんと成立していて、外国ともつきあうことが出来るのは事実だろう。それに、考えるんだつたら、逆に日本や中国にある、そういうものの代りに韓国には何があるかつて考えることだつてできるだろう？

— そういや、仮想歴史物つてのも韓国にはあつたぞ。

— 歴史的にそういうものが発生しにくい社会的根拠を探し出すことはできそうだよ。だけどそういうことより、もうすでに条件の変つた今でも、それがないんだから、その空白が何で埋められてるかつてこと、つまり、それらに対応する相補的なものがあるかないかつてことを探る必要があるんじゃないかな。単に、あるとか、ないとか言つたつて、それだけじゃね。

— そうだ、単に、あつたりなかつたりつてんだつたら、中国や日本にある演劇だつてねえな。落語も漫才もねえぞ。そういうやそうだ。死ぬ前に中国へ行つたとき、列車の中でラジオかけつばなしで、相声つていう漫才を放送してたぜ。

— だから、なぜないんだということ言い出せば、無いものだらけさ。だから、その理由考えることは出来るだろうけど、それはそこにいる個々の人間の問題ではなくて、そういうものがない社会の問題だろう。だからさつき、文化現象進化の中立論のことちよつと言つたじゃない。発想を逆にするとさ、僕らが

今さ、やれ落語だ、漫才だ、マンガだ、推理小説にSFなんでものがいっぱいあって、社会をにぎわしているのは、そんなもの社会にとつて屁にもならない存在だからじゃないの。あつたつてなくなつてどうでもいいから、いくらでも発生しうるし、存在が許されてることじゃないの。

—その話、まだ厳密性に欠けてるぞ。文化現象進化の中立論を唱えるんだつたら、もう少し様々な文化現象の、突然変異の発生の様子を実証しておかなきゃなんねえだろ。

—だからさ、もう一度繰り返し返さすけどね、朝鮮で、そういう一見くだらない娯楽の読み物が生き残らなかつたのは、彼らの頭の構造がどうかということではなくて、環境がそれらの生存に不利だつたからということさ。だから、なぜそういうジャンルが許されなかつたか、という社会状況の問題を歴史も含めて説明するのと、現在でのそれらの相補的存在の探求をすればいいんだよ。

—たしかに事実として、韓国はそんなもんねえんだから、個人がどうかという話にはなんねえのかな。だけど、日本にやそんなもん全部あるんだ。するてえと、その社会の中で、例えば推理小説読まない人つてな、比較的頭を使うのが嫌いな人つてのは言えるかもしんねえな。

—そうそう、僕の言いたかつたこと、まさにそのことだつたの。日本人で朝鮮の文学や語学や歴史やつてる人で、今みたいなことに着目した人まだいないみたいだよ。なぜだか、あの人たち、朝鮮や韓国のことやつていて幸せつて顔してるんだ。外国の文化の一端を研究してるんだつたら、もつと学問的な探求したら良いのと思つてたけど、一向に研究成果が

何にも出て来ないのが不思議だつたんだよ。

—そういうや、朝鮮関係の研究者つて、アマチュアとちつとも区別がつかねえよな。わたし好きなんです、とかいう感じで、アマチュアが趣味で書いてる語学の本の方が、研究者のより水準が上つてこともありそうだしな。

—それでね、何で彼らが、朝鮮の文学やら語学やら歴史やらに関わつて、幸せそうなんかつてことが、さっきの話と関係あるんじゃないかつてこと。

—ん？文化現象進化の中立論？

—その文化現象の多様性と、その存在の限らないどうでもよさね。日本にや色々な物があつてさ、それぞれが趣味で、色々なもの読んだりやつたりしてるだろ。だから、日本の社会では、様々な面での生き方があるの。そのうちで、知的な興味ない人はゴなんか読まないだろうし、頭使つて考えるの嫌いな人は推理小説読まないかもしれないし、言葉の知的遊びに関心のない人は落語や漫才なんかにも関心ないかもしれないよ。ね。—極端な言い方すりやそうなるんかな。でも逆は言えないな。漫才好きでも知的でないやつつているからな。

—ところが、そのすべてが、朝鮮では欠如してるのさ。だからさ、もしかすると、日本人で朝鮮関係を研究領域に選んだ人つて、その欠如にひかれた人間、つまり、精神的にそういうことがすかつり欠如してる人間だ、つて言えないかな？

—おつ？日本人では、知的好奇心が希薄で、頭の回らぬやつらが、朝鮮関係に携わつていてること？

—どう？

—そうか、思い出したぞ。昔ね、それと同じこと面と向つて

言われた人がいるんだ。

— やっぱりそうなんだろうね。韓国じゃ、どんな人が勉強しに来るかって期待しながら見てるのに、一向に勉強するやつがやってこないで、どっかで聞いたような知識を喋って、コネ作るのがうまいやつばかりだからね。そりゃ知的好奇心があつて、しかもそういう雰囲気好きなのもいるだろうけど、逆は必ずしも真ならずだよ。

— 確かだぜ、学会政治や自己宣伝やって、あちこちにコネをつけることがうまいの多いぜ。朝鮮の文化を研究対象にすること自体は悪くないさ、それなりの研究の成果を出してくれりゃね。なんでアマチュアと張合うことしかできねえかつての。

— でもね、こんなの別に朝鮮だけじゃないよね。学問やつてる人って、あんがい信用できないかも知れないって思うこともあるんだ。

— そりゃ、どこの世界だつて色んな人間がいるぞ。いちいち言つてたらきりないぜ。

— うん、でもね、人間じゃなくて、その学問の内容のほうを問題にしたいの。

— 内容つて？ 素人は他人の学問に口だしなんか出来ねえんだぞ。

— ほら、少年老い易く学成り難し、一寸の光陰軽ろんずべからず、つてのがあるだろ。

— ああ、朱子の偶成つてんだ。そーいや、あんた授業で朱子のことやってたっけ。

— 古典文学と朱子学のことだね。そんな時、分かったんだけ

ど、この朱子の偶成つて、朱子の文集のどこ探しても載つてないんだよね。ほかにどこをどう探しても見つからないし、しかも中国人で、この詩、知ってる人いないよね。

— そうだったっけ。日本人と韓国人は知ってるな。教科書に出てるしな。

— しかも内容も変じゃない。朱子の言つてることと違うし、詩の中の典故も使い方が違うし。

— 要するに、この詩は朱子のじゃねえぞつてんだろ。その話、前にも言つてたじゃねえの、たしか聞いたことあるぞ。

— あんときゃ、おかしい、おかしいって言うだけだったけど、あんたが死んでから論文が出たの。

— へえ、そんなこと調べる物好きがいたんだ。で結論は？

— もちろん、朱子のじゃないつてこと。しかも元々の出典が傑作なんだ。江戸時代の戯作なんだ。同性愛を扱った滑稽詩だったんだ。少年つてのは、お稚児さんのことだったのね。あんなの可愛がつてるお稚児さん、すぐ年とつて髭が生えて来たりするよ、早いうちに可愛がつておきなさいつてなことかな。

— おもしろいな。そんなんが国定教科書に堂々と載つてたんじゃねえか。

— だろう？ だのに、未だにこの詩はあちこちの本に載つてあるよね。しかも、もとの出典がどうであれ、そうやって学問を勧める詩として読めるんだからかまわないつて人もいるのね。

— 言ってる。なら、ああら有難や、親にも見せぬ観音様の御開帳、なんて猥褻なのが、将来は、深遠な仏教歌として、高校の教科書に載るんだぜ。

—まあまあ、それはともかく。僕が変に思ってるのは、日本だつて韓国だつて、朱子学の權威だつていう学者が、わんざかいたんじゃないの。だのに、この詩が偽物だつて言う人が、この百年、誰もいなかったつての妙だよ。びつくりしたのは、日本と朝鮮の朱子学について、分厚い本を書いた先生の、漢文の解説にも、この偶成が載つてるんだよね。ひとつも疑つてないんだ。出典も調べてないんだね。

—そんなもんさ。たぶん、詩の内容を朱子の思想と突き合わせるつてことには興味なかったんだ。詩は詩として、いったんお説教して、次は朱子がどんなに偉いお方かつて説教するだけ。肝心の朱子の思想が何かなんて、考えたこともないんだ。知ってるのは、文集の例文や人間関係とかいうことだけ。

—だから、この詩を見ても、朱子の言つてることと違つてるぞ、つて変に思うことなんかなかったんだよね。

—だから、偉そうにしてるやつつて、信用できねえつてことよ。文化だつて思想だつて、ただ商売人として輸入品の宣伝してるだけじゃねえの。品質についての保障は製造元で責任を負います、つてなことだぜ。

—要するに通俗研究つて、そんなものじゃないの。それだね、その文化つていえばさ、異質な文化を理解するには、その地域の言語を習得しなければならんつて言うだろう。ほんとかな。

—そんなことねえよ。言葉に関係ねえことだつていっぱいあらな。

—たとえば？

—考古学とか建築とか陶芸とか美術とかさ。物を調べると分

かる分野があるじゃねえの。

—そうか、言葉を使わなくても分かることつて、かなりあるか。じゃあ、言葉を学ぶと、どこが違つてくるんだらうね。

—その地域の言葉勉強したつて、文化が分かるようになるつてこたねえよ。言葉なんかいくら勉強しても、それだけじゃねえの、何が出てくんか？

—だつて、歴史だつて思想だつて文学だつて、みんなその地域の言語を学んでから調べてんだろ？

—だけんどさ、その歴史やつてるやつ読んてるのつて何なの？昔の記録とか、何年に何が起こりました、誰が何をしました、何を考えました、つてなことが、その言語と何の関係があるつての？

—うん？だけど、他の言葉で書かれたものないから、やっぱり、その言葉勉強しなきゃ分かんないんじゃないの？

—だろ？それだけのことじゃねえの。他の言葉で書かれたものないから、仕方なしにその言葉勉強して、その言葉で書かれた文献読むつてえの、それこそ、その文化を理解するつてことたあ関係ねえだろ？

—確かにね。ただ単に、その言葉で書かれた文献でしか読めないから、それを読むつてことだけだつたら、いくら勉強したつて、単にその地域のこと知らることにしかなんないね。別に、その地域の文化を理解するとか、その地域の人の考えを理解する、つてこととは関係ないかもね。

—だろ。それでさ、ただ外国語を勉強してさ、それで書かれたもの読んだり、その人と話したりしたつてさ、それだけじゃ、その地域の文化を理解するとか、その地域の人々を

理解するつてのにや、すぐ繋がんねえんだよな。その言葉学んで、その先何するかって考えねえとね。

—確かにね、今でもそうかもしれないけど、昔はさ、彼らの気持ちを理解しようとして、朝鮮語を一番熱心に勉強したのは、警察の人たちだったかもしれないよね。ただ支配のためとはいえ、一生懸命だったろうし、熱心さからいえば、彼らにはかなわないかもね。

—だからさ、外国語勉強してることだけじゃ、何にもなんねえんじゃないか。

—そうさな、外国語を勉強したくせに、勉強しないで理解してる人の水準にも達してなきや、お話しにならないよね。でもさ、専門の学問として言葉やってる人はどうなの？

—言葉やるつて？その地域の言語調べて分かるのは、その言語の構造だけじゃねえの。そんなん、その言語使ってる人たちの考えや気持ちがわかるんだったら、死体解剖すりゃ魂が見つかる、つてことになんじゃねえの。

—だけど、解剖すりゃ、人間の体の組織の構造や働きが分るじゃないか。

—だからどうだつての。そいで、その人の考え方や、気持ちの持ち方が分かるつての？

—確かにね。だから、あんまり教養に関係なさそうに見えるんかな。文化なんて興味ないみたいだからな。

—自分以外の文化に、理解示そうつてのは、あんまし、いねんじゃねえの。

—でも、それ、日本人だけじゃないよ。日本のことなんかじゃちつとも関心なくせに、自分とこのこと、日本人に教

えたがるやつっているじゃないか。なんであんなに、自分たちのこと教えたがるんかな。

—日本人だつて、外国にいきや、そんなのいっぱい、いるんじゃないか。

—昔は、言語やつてると、その言語使ってる人たちのこと理解できるようになる、つて気がしてたけど、どうも違うね。みんな自分のために、他者を利用してただけなんかね。

—あんまり大まかなこと言つたつて、何にもなんねえけどね。

—そいういや、一つあるよ。あのね、僕の周辺で学生だけじゃなくてね、翻訳やつてる専門のやつでもね、時々みょうちくりんな翻訳するのに出会うことあるんだ。

—そりゃ誰だつて、変な翻訳するこたあるぜ。

—それでね、その変な訳に出会つたとき、すぐさま聞くの。もしかすると、それ、例の辞書使つたんじゃないのつて。するとずばり、例外なしにそれが当たるんだ。

—例の辞書つて？あの俺がやりかけて止めたやつ？

—そうそう、あれね。あんたの仕事は一向に進まなくて、そのうちあんたは死んじまうし、そいでね、その後ひきついだのが、商売上手なやり手だつたつてわけ。出版社も大手だし、学生やらなんやら朝鮮語の周辺にいる人間を大量動員して作つたのね。いま一番人氣があつて売れてるんじゃないかな。

—そうか、俺が死んでから、そんなことになつたんだ。

—ところが中身が面白いのね。昔から辞書には誤植がつきものだよ。ガルソンがガルコンになったり、ニムラサキなんてみょうちくりんな新種の蝶々が登場するつてのはご愛嬌だけど

ね。この辞書のは誤植なんてものじゃないのね。誤訳奨励賞ねらったんかなって思っちゃうんだよね。

—でも、日本で出てる朝鮮語の辞書がいいかがげんてな、前にもあったじゃねえの。ほら何回も文部省から科学研究費を貰って、やってますって宣伝し続けて、出版社はそのため倒産して、別の出版社で出るようになった、あのばかでかいやつよ。

—ああ、あのなんとか大辞典というやつね。僕は古本屋に売って元とったけどね。あれも何だい、自分で勉強しましたってことを一生懸命書き込んだんじゃないけど、肝心の朝鮮語の使い方になると、さっぱりなんだよね。あんなの見るんだったら、本国の小型の辞書のほうがまだよね。

—確かだよな、ときどき面白いこと書いてあったけど、肝心の本文の方は、例文の採り方一つとっても、信じられないほどひでえよな。

—あれが出たとき、誰かが言ったよな、これで韓国の学者はかなり安心しましたねって。何年も新聞などで大きく取り上げてきたから、どんなものが出るかって、関心持ってたけど、実際に見たら、なーんだってね。

—だめなんだよな、まともな研究者ってどこにもいねえんだ。

—あなたはそういうけど、僕は『コスモス朝和』は評価してるんだよ。姿勢がはっきりしているしね。少なくとも例の辞書みたいに、でたらめな説明をしてないからね。といつてもあなたはあんまり仲よくなかったから、良く言わないかもしれないね。

—そんなことねえよ。俺はあの辞書の日本語の使い方がぞつとしねえっての。水準は認めてるんだぜ。あんどきや、色々うまくいってなかったけどね。それで、君はまだ生きてるんだから、そういう辞書の間違い調べて、発表したらどうなの。少しはましになるんじゃないか。

—僕はそんな暇ないよ。辞書の点検なんて僕にや興味ないし。それに、このこともうインターネットで少し流してる人もいるみたいね。そういや、ある先生がこの辞書のこと、『お笑い韓日辞典』って言ってたな。

—おっと、それいい線いつてるぜ。あなた、今さ、台湾や大陸に進出してると吉本興行さ、韓国進出する時、ギャグのネタ本として絶対必需品になるぜ。

—確かに読んで大笑いの例文があるのは事実だね。貴重な例文だよ。英語だったら習いたての中学生ぐらいの作文が辞書に載ってるってことだからね。でも変なんだよね。自動車なんかだったら、リコール制度があつてさ、販売者側の責任で不良品の買い戻しをするじゃない。この辞書に関しちゃ何の音沙汰もないんだよね。

—どうせ、関係者たちの談合で、儲けるだけ儲けましようってことだろ。そして密かに、欠陥直して、それはそれとしてまた売りつけて儲けようってんじゃないか。いや、違うかな。こいうやって、学習者にとんでもないこと憶えさせて水準落しときゃ、教える側との差がますます開いて教師が安心してられるってことかな。

—どうだろうか。直すにしちゃ、あんまりにも量が多すぎる気もするし、本人たち、気がついてるんだるか？気がついてな

きや、研究者の資格ないってことだし、知ってるのに知らんぷりしてるんじゃないや、研究者としてのモラルがないことになるよな。

— 教えてるやつでそんな辞書使ってるなやつがいるんかな。
— いるよ。ほんとなら本国の辞書使わなきゃならないはずなのに、こんな使ってるどころか、ネイティブの人に、単語の意味を日本語ではどう言うんだとしつこく聞いてる人がいるからね。もとの言葉でどう説明するかだけ聞けば済むのに、なんで彼らに日本語で説明させなきゃなんないんだろうね。どんな時でも、相手の言葉で考えるってことなんか一切考えないで、いつも、それは日本語では何て言うんだろう、ってことしか考えてないのね。

— 要するに、いつでも、自分とこの文化の枠組みでしか、相手を判断する気がないってことじゃねえの。

— それでね、いったいどうしてこんなことが起こったのか、そのことも気になってね。

— そりゃ簡単なことじゃねえの。さっき翻訳のことで言ったことと同じだぜ。

— どういうこと？

— 要するに、俺たちの近代化って、先進国だからの文化を取り入れ、それらしき制度を作っただろ。向うにあるものは真似できるよな。けどどないものはだめなんだよな。

— ないって？

— だからさ、例えば朝鮮の文化に対することさ。言葉に関してだよ、こうした辞書を作るってのは真似だけじゃできねえよな。自分でやんなくちゃだめだぜ。そういうことはだめ

なんだ。植民地主義を批判するって言いながら、オリエンタリズムとかなんとか言っつてさ、批判までまたよその借り物だろ。俺たちの水準はオリエンタリズム以前でしかないんだぜ。

— まあそんなことになるんどうけどね。でもね、僕はそんな辞書をおおっぴらに批判する気はしないけど、将来の研究者に対してね、仕事の材料を作ったってことでは、評価はしてるんだよ。

— 何で？

— だって、そんな辞書が出たってのは事実だろ。証拠が残ってんだから。将来の人間から見りゃ、今の言語の研究者がいかに水準が低いどころか、でたらめだったかってこと、一目瞭然じゃないか。

— そりゃいえるな。

— そいでさ、学会でもどこでも論文の審査だとか言っつてさ、感心してるのは、伝統的な方法を踏まえてるとか、うんとこさ例文集めるとか、わんさか参考文献見るとか、そんな形式的なことばかりなんだ。

— どうせ中身なんか読む気もないんだ。まるでビーズ玉やガラス玉に眼を耀かせてる未開人ってイメージはてめえら自身のことだったって見せつけてるようなもんだぜ。

— だからさ、やってるこた、政府の役人たぶらかして、補助金もらったり、大手の出版社にコネ作ったりとか、いかさま師よろしく世の中わたりあるくことだけは一人前ってこと。

— ともしかしたら、俺たち勘違いしてたんかもしんねえな。みんなお互いに研究なんかしてないの知ってて、示し合わせて談合して、よいしょ、どっこいしょって、互いに持ち上げ合っ

てつたんだ。そんなことも知らないで、言語を研究するんだつたら、その言語によって支えられる思想や文化の問題につなげなきゃなんねえだとか、研究だの論文の水準がどうだの言つて。あいつら裏でせせら笑つてたろうな。世間知らずめつて。

—だからさ、そんなのは通俗研究どころか、低俗研究にしかなんなかつたんだよね。

—やつてること、いつも、権力あるものや勢力あるものへばかりついて、世の中わたりあるいてるだけだぜ。

—まるでコバンザメみたいだろ。わが吸盤の優秀さもて世の中を渡りけりつてわけね。

—なんでえ？まるでポルノ小説じゃねえの。

—ん？

